

果樹類 マイマイガについて



図1 モモに産下された卵塊



図2 リンゴ幼木の新芽を食害する孵化幼虫



図3 老齢幼虫



図4 雌成虫（体長約40mm）

1 生態

本虫は年1世代の発生である。卵塊で越冬し、幼虫の孵化は4月中旬頃よりみられる。幼虫は6齢を経て蛹化し、成虫となる。成虫の発生は7月上旬頃よりみられ、交尾後産卵し、まもなく死亡する。卵塊は雌成虫の茶色い毛で覆われており、約500個の卵がある。産み付けられた卵は翌春孵化する。

成虫は好光性であり、光源に群がる性質があり、多発時には街路灯や家屋建物の壁などにも飛来し、そこで産卵する。

孵化直後の幼虫は糸を吐き、ぶら下がり風により拡散する。このため、ブランコケムシという別名がある。幼虫は、いわゆる毛虫であり、体の前部に青、後部に赤の斑点がみられることが特徴である。幼虫期間は約2か月で、老熟すると体長は約50～70mmとなる。蛹化後、約10日～14日で成虫となる。雌成虫は体長40～50mmで体色は黄白色、雄成虫は体長20～30mmで体色は黒褐色と雌雄異形である。成虫の寿命は、約7～10日であり、雌成虫の生涯産下卵塊数は原則1個である。

2 発生状況

多発時には、成虫が山林から離脱し、果樹や街路樹、家屋建物などに産卵を行う。果樹等に産み付けられた卵から孵化した幼虫は、新芽などの柔らかな部位を食害し、食べつくすと新たな葉を求めて、他の枝や樹へ移動する。果樹園内で産卵がみられない場合でも、近隣の山林から幼虫が移動し、加害することもある。

本虫は多食性であり、樹木のほか、リンゴ、モモ、カキなどの果樹類、野菜類、花き、水稻なども食害する。

本虫は通常広葉樹の葉等を食べ、山林内で生活を完結する。約8年～11年間隔で大発生するといわれているが、大量発生の理由は不明である。大発生時には、昆虫疫病菌や核多角体病ウイルスの蔓延により幼虫の大量死が起こり、発生が終息に向かうとされる。

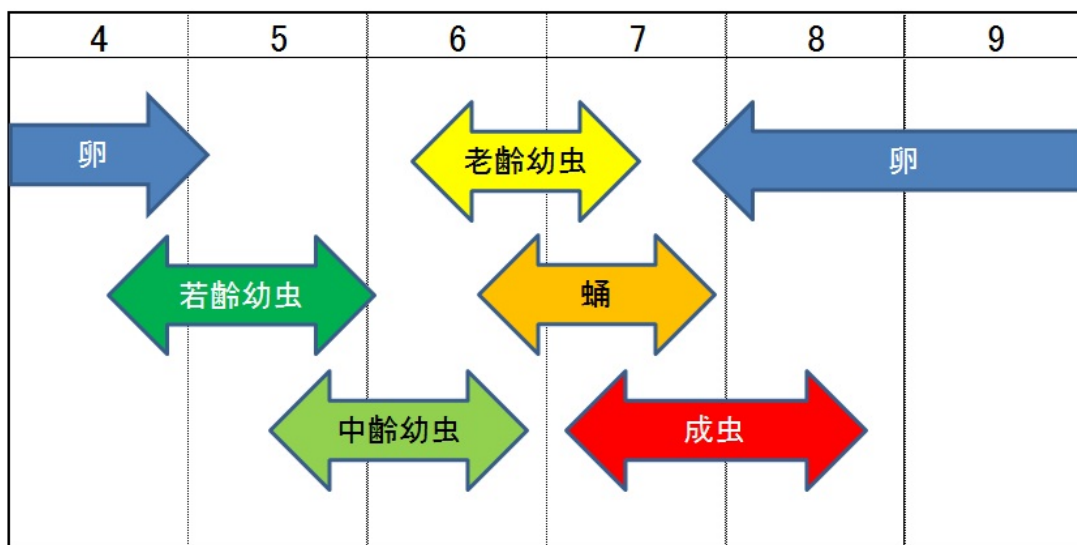


図5 マイマイガの時期別各生育ステージ

3 防除対策

(1) 卵塊の除去

圃場内及び圃場周辺の卵塊を除去する。

(2) 薬剤による防除

幼虫の齢期が進むと薬剤の効果が低下するため、体長1cm程度までの若齢幼虫の防除に重点を置く。また、老齢幼虫になるにつれ摂食量が対数的に増加するため、すみやかな防除が必要である。

本虫の防除にあたっては、適用病害虫名として「マイマイガ」、「マイマイガ幼虫」、「ケムシ類」と記載があるものを使用する。